安部公房「可愛い女」論
――日本共産党批判の寓意――

糸賀　寛

はじめに

一九五九年六月季刊『現代芸術』発表のミュージカル「可愛い女」は、同年八月に大阪労音一〇周年記念公演で上演後、一九六九年四月に桐朋学園短期大学演劇コース二期生卒業公演で、公房自身の演出により再演され、この時の改稿版脚本が『安部公房戯曲全集』（一九七〇年一月新潮社）に収録された。なお、北岸佑吉「大阪労音十周年記念公演『可愛い女』」（一九五九年一〇月『新劇』七五）によれば、大阪労音での公演シナリオは初出から相当変更されていたらしいが、改稿期間の短さから、主題が一変したとは考えにくいため、本論では初出を底本とする。

以下、本作の梗概。泥棒集団と刑事の住むアパートに、人の言葉に従順な可愛い女が住んでいる。ある時、金貸しが彼女に求婚し、二人は夫婦となるが、泥棒集団の頭目と刑事からも求婚されたため、可愛い女は三つ子と偽り、日替わりで三人の夫の相手をする。泥棒集団は人を眠らせる歌を使って盗みを働いているが、隠し事のできない可愛い女は歌のことを刑事に話してしまう。刑事が耳栓をして寝ずの監視を始めたことで、泥棒集団は窃盗を行えなくなる。盗難で金に困る人が減り、貸付業は停滞。刑事も泥棒検挙の実績を作れず、馘首の危機に瀕する。事態を打開すべく、三人は可愛い女の助言で手を組む。刑事は泥棒を見逃し、泥棒集団は定期的に刑事へ仲間を供出する。金貸しから運転資金を融資された泥棒集団は市民から貸付金を盗み、被害に遭った市民へ金貸しは再び金を貸す。その後、三人は、可愛い女が実は一人だったと知るも、結束を守るために彼女の共有を誓う。

鳥海「オトナ向きの台本　ミュージカル「可愛い女」」（一九五九年八月二七日『朝日新聞』大阪夕刊）、北岸（前掲）、英「どこに演劇があるか」（一九五九年九月一四日『読売新聞』夕刊）など、時評の多くは、資本家による支配体制を風刺した本作を、凡庸と評価した。その一方、自ら再演するほど公房が気に入っていた作品で、彼の関心が強く反映されていたと見做せることから、彼の当時の思想を解明する上で分析する価値がある。

鳥羽耕史「ミュージカルスという〈記録〉――「可愛い女」１９５９」

（二〇〇七年五月一葉社『運動体・安部公房』）と時評は、共に資本主義社会の諷刺を本作から読み取るが、その内実を具体的に述べたのは前者のみである。鳥羽は、金貸し＝資本家、頭目・泥棒＝革命家、刑事＝政治家と見て、本作を資本主義社会における三者癒着の寓話と解釈した。また、「最も先鋭的な革命家であった泥棒通信の発行者」（泥棒集団の一員で、「泥棒通信」という新聞を発行して泥棒達に頒布している男）を泥棒集団が供出する点は、日本共産党第六回全国協議会（六全協）で極左冒険主義を否定した日本共産党の諷刺だとも述べた。本作をサタイアと見る点に異論はなく、エッセイ「ミュージカルスの反省――新劇の運命4」（一九五九年一〇月『芸術新潮』、『全集一一巻』収録）における公房の発言、「ミュージカルス」は「現実を、きわめて単純な仕組と法則にくみこ」む「遊びの精神から出たものである」（一九六頁）も、これを補強する。

また、同エッセイで公房は、「「泥棒通信」の発行者（理想主義者）は、ついに無思想という美徳による組織者である「可愛い女」に勝てなかった」（一九九～二〇〇頁）ことが本作の「根本テーマ」だったと述べている。先述の通り、本作は寓話と見做せるため、「根本テーマ」を理解するには、登場人物の寓意を明らかにする必要がある。

ただし、鳥羽論の、頭目を革命家と見る点や通信を六全協の風刺とする点はやや疑問で、頭目について言えば、後述の通り、企業経営者と見る方が適切であるように思われるし、前掲「「泥棒通信」の発行者（理想主義者）は、ついに無思想という美徳による組織者である「可愛い女」に勝てなかった」を踏まえると、通信は、六全協ではなく、日本共産党の組織化を批判する存在と捉えられる。本論では、典拠の解明および本文読解を基に、鳥羽論とは異なる読みを提示したい。

以上を踏まえ、本論は、「可愛い女」に見える寓意と公房の組織観を、双方と関係の深い可愛い女・金貸し・頭目・刑事・泥棒通信の分析を通して論じる。一節で、金貸し・頭目・刑事の作るシンジケートの、二節で、可愛い女の、三節で、泥棒通信の寓意をそれぞれ示した後、四節で、「根本テーマ」の内実を検討する。なお、泥棒通信について、人物を指す場合は通信、新聞を指す場合は泥棒通信と表記する。

一　シンジケートの分析

本作は、金貸し・頭目・刑事の三者がシンジケートを作るところで幕を閉じるが、その設立のきっかけは可愛い女であり、それゆえに彼女は「組織者」と見做せる。では、彼女の組織したシンジケートには、いかなる寓意があるのだろうか。

一・一　金貸し・泥棒集団・刑事の造型

まず、金貸しの寓意を考える。鳥羽（前掲）は金貸しを資本家の比喩と見たが、金貸しが金融業を営んでいる点に鑑みれば、資本家の中でも、貸付で利益を得る銀行資本家に擬せられていると読める。三場の彼は、自身の仕事について、

金貸し　じゃあ、金を貸してその使用料をとったときだけ悪くい

われるのは、一体どういうわけなんだ？（二二八頁）

と述べており、貸付により使用料＝利子を得ていると考えられる。更に、次の通り、一〇場では、実際に市民へ金を貸し付けている。

金貸し　（前略）お金を借りたいと仰（ママ）るんですな。いいでしょう。奥さんの災難ときいては、お貸ししないわけにはいきますまい。だが、ちっとばかり、利子は高い。（二五一頁）

他方、五場で刑事は、金貸しに、「お宅さん、なにやら金融業をいとなんでおられるそうですなあ……」（二三二～二三三頁）と発言していた。

次に頭目について。鳥羽（前掲）は頭目を革命家の寓喩と見たが、本文の描写から、事業によって貨殖する産業資本家とする方が適当ではないだろうか。一場の頭目は、泥棒業に関し、「技術導入によって、現在の事業ののびなやみが、一挙に解決されるとまではいかなくても、目にみえる成果があがるにちがいない」（二二四頁）と述べているし、一一場で、可愛い女が人を眠らせる歌の秘密を刑事に知らせた際には、「じゃあ、今夜はきっぱり臨時休業といくか……むろん、給料は、いつものとおりだ」（二五五頁）と発言する。また、泥棒業が行き詰った一二場では、「部屋代の工面もあるし、乾分どもの給料もなんとかしなけりゃならない」（二五八頁）と語っている。加えて、泥棒集団は、モサ（掏摸の隠語）班、シノビ（夜盗の隠語）班、タタキ（強盗の隠語）班という三つの専門家集団で構成される他、秘書や、「働く婦人の地位向上のために」（二二四頁）活動する婦人部も存在し、組織体制は会社を彷彿とさせる。窃盗を「事業」と称していることや、「給料」という語に雇用のニュアンスが読み取れる点、組織の形態から、泥棒集団は会社に類似したものと見做せる。従って、泥棒集団＝会社、泥棒＝賃金労働者（プロレタリアート）、頭目＝産業資本家と捉えられる。

また、泥棒集団は、六場と一〇場で、「「みんな睡れ」の歌」（二三六頁）を使って人々を眠らせ、窃盗を行っている。[1] この歌は「団長の作詩作曲（ママ）」（二三七頁）によるもので、頭目は仕事道具＝歌を団員へ供与していると言え、「「みんな睡れ」の歌」は労働手段に擬したものと見做せる。労働手段は、無産階級が生産物を生み出すために使う道具・機械などを指すマルクス主義用語で、資本家の独占物とされていた。

最後に刑事について。これは文字通り警察を表すが、レーニン『国家と革命』（森宏一訳、一九四六年八月社会主義著作刊行会）[2]の「常備軍や警察は国家権力の主要な武器なのである」（七頁）という記述や、本作発表時の公房が共産党員であったことを踏まえると、鳥羽（前掲）の指摘通り、刑事＝国家と読めるだろう。

以上のように、金貸しは銀行資本家の、頭目は産業資本家の、泥棒はプロレタリアートの、「「みんな睡れ」の歌」は労働手段の、刑事は国家権力の寓喩とそれぞれ解釈できる。

一・二　泥棒集団とマルクス主義

次に、泥棒集団とマルクス主義の関係を確認しておきたい。影響が明確に見られるのは、六場の次の場面である。

頭目　もし、泥棒がいなくなったら、錠前屋は破産してしまう……

可愛い女　まあ！

頭目　それじゃ、巡査がクビを切られたら？

可愛い女　可哀相だわ。

頭目　泥棒がいなくなったら、まず巡査の半分はクビだろうね。

可愛い女　まあ！

頭目　それに、可愛い番犬も、みんな追んだされてノラ犬になって、犬殺しにとっつかまって、皮をはがれてしまう。

可愛い女　可哀相だわ。

頭目　それから、裁判官の半分はやはりクビ、弁護士も半分は失業、法学部を出た学生は、就職難で次から次に自殺してしまうだろうし……やっぱり、泥棒は、いた方がいいんじゃないかねえ？

可愛い女　ええ、そう思うわ。（二四二～二四三頁、以下、傍線は論者）

これと類似した記述は、小説「パニック」（一九五四年二月『文芸』、初出未見、引用は『全集四巻』に拠る）の、犯罪を事業とする会社・パニック商事の社訓に見られる。

――犯罪者は、犯罪を生産するばかりでなく、また刑法を、刑法の教授を、さらにこの教授が自己の講義を商品として売るために必要な講義要綱を生産する。高名なるロッシャー教授もいうとおり、その教授が講義要綱を書く個人的たのしみを無視するにしても、これは国富の増大に利するものである。

犯罪者はさらにあらゆる裁判官、廷丁、刑事、刑吏、陪審員等々を生産する。これらすべての各職業は、それぞれ人間精神の各種能力を高め、新しい欲望とそれを満たす新しい方法を発明する。拷問だけでも、機械の発明をうながし、まじめな手工業者の一群をその生産に従事せしめた。

犯罪者はまた、状況に応じ、道徳的、もしくは悲劇的な印象を生産し、大衆の美的感情のケイハツに奉仕する。犯罪者はかくて、単調な社会にたのしみをあたえ、芸術をも生産するのだ。

犯罪者はまことに生産の発展にコウケンするものである。泥棒が錠前を発達させた。贋金作りが、お札の印刷を発達させた。詐欺が顕微鏡の需要をました。犯罪者は社会のために不可欠な要素である。（八二頁）

犯罪者を、様々な業種の礎となる重要な存在と見ている点や、犯罪を事業とする企業がそれを主張している点が、両作に共通する。「パニック」に拠れば、この社訓は「剰余価値学説史の一節が幾分の変形をうけて引用され」（八二頁）たものらしいが、以下に示す通り、マルクス『剰余価値学説史　一巻』（向坂逸郎訳、一九四九年二月黄土社）が下敷きとなっていることは明らかだろう。

（前略）犯罪者は犯罪を生産するのみならず、刑法も、従つてまた刑法に関する講義をする教授も、そしてその上に、この同じ教授が彼の講義を『商品』として一般的の市場に投げ出すところの必要なる講義案をも生産する。それを以て、国民的富の増大が現はれる、権威ある証人ロッシャー教授が吾々にいふやうに、この講義案の草稿がその筆者自身に与へる私的享楽を全然度外視するとするも。

犯罪者は、さらに全警察裁判及び刑事裁判、廷丁、判事、刑吏、陪審員等々を生産する。そしてそれだけの社会的分業の範疇をなすこれら各種の職業部門は、人間精神の種々の能力を発展せしめ、新なる欲望とその充足の新なる方法とを作り出す。拷問だけでも、最も有意義なる機械的の発明に対する機縁を与へた、そしてそれらの要具の生産において、おとなしい手工業者の一群を使用した。

犯罪者はそれ〴〵の場合に応じて、或は道徳的の、或は悲劇的の印象を生産する。そして公衆の道徳的及び審美的感情の動きに対して一つの『労務』を果す。彼は、（中略）芸術や、文学、小説や更に悲劇すら生産する（中略）微細な点まで、犯罪者の生産力の発展に対する影響は立証されることが出来る。若し一人の盗人もなければ、錠前屋が今日の完成にまで繁栄したであらうか？　若し貨幣偽造者がなければ、銀行券の製造がその今日の完成にまで成長したであらうか？　商業における詐欺なくして、顕微鏡がその通常の商業的部面への道を見出したであらうか（後略）（三八二～三八三頁）

上記のように、本作には、「パニック」を経由してマルクス主義の影響が見出せる。マルクスの著作において、引用部は、あらゆる活動が社会に富を齎すと主張する、先行の経済思想を皮肉るものだが、頭目＝産業資本家は、それを文字通りに受け止め、自分に都合のいい結論を引き出している。解釈の捻じ曲げによって、共産主義という敵対的思想さえ利用する、資本家の狡猾さやエゴイズムが看取できる。

一・三・一　シンジケートの寓意（一）――金貸しと頭目

本項では、マルクス主義文献との類似性を踏まえて、シンジケートの寓意を考察する。最初に、レーニン『帝国主義論』（青野季吉訳、一九四七年四月社会書房）が金貸し・頭目の設定に与えた影響を論じたい。

まず、金貸しと頭目の結合過程を確認する。本作で金貸しの事業が拡大していることは、「あの強欲非道な金貸しの跳梁はみのがせ」ず、「あちこちでしぼり上げて歩」（二三七頁）いている、という六場の頭目の台詞から窺える。また、四場の通信が、「うちの団長は、［技術班］班長さんの発明した人造指紋つき手袋で、団外の泥棒たちを罠におとしいれようとしているんですよ」（二三一頁）と言っているように、頭目は、独占によって組織を発展させようとしていた。

その後、一一場において、刑事の監視のため、泥棒集団が窃盗を行えなくなると、一二場の金貸しは「泥棒の被害がなくなったので、借金をする人」（二五六頁）が減って困窮し、頭目も「部屋代の工面もあるし、乾分どもの給料もなんとかしなけりゃならない」（二五八頁）の

に収益が得られなくなる。

進退窮まった二人は、可愛い女の助言を基に業務提携協定を結び、金貸しは泥棒集団へ運転資金「一千万円の貸出しを」（二六二頁）行い、泥棒集団は貸し付けを受けた市民から金を盗んだ。窃盗に遭った市民は再び借金をしたため、金貸しは更なる利益を上げた。このようにして、金貸しと頭目は危機を乗り越えたのだった。また、一六場において、金貸し・頭目・刑事の協定のために「市況は活発化し」（二六四頁）ていることや、頭目が三人の関係性を「シンジケート」（二六二頁）と呼んでいることから、金貸しと頭目は提携により経済上の支配的地位を獲得したと言えよう。

以上をまとめると、事業を拡大していた、金貸し＝銀行資本家と頭目＝産業資本家は、不景気を機に業務提携して苦境を脱し、更なる経済発展を達成したのである。

レーニン『帝国主義論』にも、産業資本と銀行資本の融合過程が記されている。一章によると、産業資本は、「産業のどえらい発達と、凡ての大企業における生産の著しく急激な集中」（二八頁）によって、「その発展の一定段階において独占を招来する」（三四頁）。また、二章によれば、「小銀行は大銀行のために追ひ退けられ」（四八頁）、銀行資本も独占化されるという。更に、三章では、産業資本と銀行資本の発展の果てに「銀行と産業の融合または合成」（六八頁）がなされて金融資本＝独占資本が誕生し、市場を独占すると論じられている。

更に、五章では、ドイツの電気工業を例に、不景気に際して銀行が「比較的規模の小さい企業の没落と、それの大企業への融合とを、促進し、激化」（九四頁）するために、不況が独占資本誕生の追い風になると述べられていた。

以上のように、本作とレーニンの著作は、発展した事業を持つ金貸し＝銀行資本家と頭目＝産業資本家が癒着する点および不景気が両者の融合を促す点が類似する。独占資本の形成過程を定式化したのは、共産党の基本文献でもある『帝国主義論』だから、これが下敷きである蓋然性は高い。

一・三・二　シンジケートの寓意（二）――国家と資本家

続いて、国家と資本家の関係を考える。泥棒集団の休業により泥棒を検挙できなくなった刑事は、一二場で「［泥棒逮捕の］成績をあげなけりゃ、私はクビにな」（二五八頁）る状況へ追い込まれたため、一四場において、泥棒を提供される代わりに窃盗を黙認する条件で、金貸し・頭目とシンジケートを結成した。

国家と資本家の融合に関し、『帝国主義論』三章には、以下のようにある。

> ごく少数者の手に集積し、事実上独占をほしいままにしてゐる金融資本は、株の発行、有価証券の発行、国債発行等の巨大な、常に増大する信用を把持し、全社会に向つて独占主に貢物を納めしめ、もつて金融寡頭政治の支配を確立する。（七六頁）

ここに出てくる金融寡頭政治とは、金融資本と連携した政治体制を指

すと考えられ、同章では、「凡ての他の資本形態にたいする金融資本の優越は、金利生活者及び金融寡頭政治家の支配的役割を意味」（八三頁）するとして、金融資本と結合した政治家が支配的地位を高めると示唆されている。

なお、他のマルクス主義文献にも、国家と資本家の協調に関して言及がある。例えばレーニン『国家と革命』（前掲）五章には、

資本主義ではわれわれは国家をこの言葉の本来の意味でもつ、つまり一階級［労働者］の他階級［資本家］による、しかも多数者［労働者］の少数者［資本家］による、抑圧の特殊な機関をもつのである。（一一四頁）

とあるし、マルクス、エンゲルス『共産党宣言』（早川二朗訳、一九四六年九月ナウカ社）にも、「現代国家権力なるものは、全ブルジョア階級の共同的業務を監理する委員会に過ぎない」（二八頁）とある。ただし、国家と金融資本（独占資本）の癒着を具体的に論じたのは『帝国主義論』であるため、これが主な参照源だろう。

一方、シンジケート結成以外のシーンにも、国家と資本家の関係を描写した箇所がある。

頭目　なにもそう、カマトトぶることはないでしょう。警官の給料が安いのは、警官を金に弱くさせるための、政府の方針だってことですよ。
金貸し　そのとおりだ。
刑事　そ、それは、みとめます。（一二場・二五八頁）

こうした国家役人の買収は、マルクス主義文献でしばしば取り上げられる話題で、例えば『国家と革命』には、二月革命後に発足したロシア臨時政府の官吏・バリチンスキーが、資本家の横暴を見逃した報酬に、退官後、「資本家から或る一小地位と年額十二万ルーブルの俸給を」（一三頁）もらったとある。また、他の例としては、逗子四郎が、「日本官僚制の現状と性格」（一九五七年六月『前衛』一二九）で、次のように述べている。

（前略）また、［官僚は］昔は、退職金で家を建て、家作までつくり、恩給でのんびりくらしてゆくこともできたが、今は退職金で、古家を買う程度一万〜二万の恩給では子供を学校へやることもできない。

従って官僚は、特権的な官僚といっても、独占資本にその身をゆだねざるをえない。（中略）退職した特権的官僚が、もっとも多くゆく道は民間会社へ〝天下る〟こと――独占資本にひきとってもらうこと――と、外郭団体のポストへつくことである。

この将来のことを考えれば、官僚は独占資本と自民党にたえず忠勤をはげんでおかねばならない、独占資本からいえば、将来のポストを保証してやることをもって、官僚を買収するのである。（七五頁）

独占資本による官吏＝国家の買収という見方は、マルクス主義者に共有のものと言え、公房は、これら記述を基に国家と資本家の癒着を描いたと考えられる。

以上より、金貸しや頭目と結託した刑事＝国家権力が、自身を利するべく彼らへ便宜を図る点は、マルクス主義的国家観に則した表現と言える。

最後に、一節全体の内容をまとめておこう。検証の結果、金貸し・頭目・刑事は、それぞれ銀行資本・産業資本・国家権力の寓意で、三者のシンジケートは、レーニンを下敷きとする、金融資本と国家権力の結合した経済的支配体制の寓喩であると解釈できた。

二　可愛い女の人物像

鳥羽（前掲）は、可愛い女を、権力者「の誰にでも微笑む一般大衆」のアレゴリーと見たが、本作には彼女以外の市民が登場する他、公房が「美徳による組織者」（前掲）と特別視している点から、市民とは異なる寓意を持つと推察される。

寓意解明のため、まずはチェーホフ「可愛い女」からの影響を考察する。既に鳥羽が、可愛い女は「夫が代わる度にすっかり意見を変えるチェーホフ「可愛い女」」に似ていると指摘しているが、具体的な類似点や公房の読書歴には言及していない。

公房によるチェーホフへの言及として、「中埜肇宛書簡　第5信」（一九四四年一月九日、『全集一巻』収録）[3]に、「伯父ワーニャの中の医師・アーストロフの言葉を想出して見て下さい」（九二頁）とある他、講演速記録「「どれい狩り」について」（一九五五年六月七日麻布公会堂開催、記録者不明、『全集五巻』収録）では、「チェホフなんか好きですか」という質問に「ええ勿論好きです」（八七頁）と答えている。

拙稿「安部公房とエドガー・アラン・ポー（一）――「異端者の告発」「どれい狩り」「第四間氷期」をめぐって――」（二〇二二年九月『京都大学國文學論叢』四七）にある通り、公房は高等学校時代に、「可愛い女」収録の『世界文学全集24　露西亜三人集』（一九二八年一月新潮社）を含む、『世界文学全集』[4]を読んでいた（以下、引用はこれに拠る）。

チェーホフ「可愛い女」の主人公・オレンカは、男達から「あゝ、なか〳〵美人だな」（二四頁）と言われる女性で、唯一の肉親である父を亡くしている。屋外劇場の支配人・クウキンと結婚してからは、彼の影響で「芝居と云ふものは人生に於ける最も重要なもの」（二五頁）と考えるようになった。クウキンが早世すると、材木商・プストワロフと再婚、「夫の考へは同時に彼女の考へ」（二八頁）となるが、彼も死去する。その後、オレンカの家に、昔、懇意にしていた軍属の獣医・スミルニンとその妻子が下宿し始め、彼らの息子・サアシャと仲良くなったオレンカは、自分の意見を持つようになる。スミルニンの妻が出奔し、彼も家を空けがちになったため、オレンカはサアシャを引き取る。幸福を覚える彼女だが、一方で、いつか、母親がサアシャを連れ戻しに来るのではと不安も抱く。

両作の共通点は三つで、第一は、主人公が夫の考えに強い影響を受

ける美女という点である。「みんなに好かれる／可愛い女」（二二六頁）と言われる本作の可愛い女は、夫である金貸しの影響で「たよりになるのは、お金だけなんだから……」（二二九頁）と思うようになり、六場では、後に夫となる頭目に「やっぱり、泥棒は、いた方がいいんじゃないかねえ?」と諭され、「ええ、そう思うわ」（二四三頁）と答える。オレンカも中々の美人と評判で、結婚していた時には夫と同じ考えを抱いていた。

第二は、主人公と懇意になる男が三人登場する点で、公房の可愛い女は金貸し・頭目・刑事と結婚し、オレンカは二人の男と結婚した後、スミルニンと親しくなる。

第三に、本作の可愛い女もオレンカも、父親を亡くしている。

以上より、本作が、チェーホフ「可愛い女」に依拠していることは明らかである。

相違点として、オレンカが、三人目の男・スミルニンとは結婚せず、彼の息子の養育を通じて自分の考えを確立する一方、可愛い女は、第三の男・刑事と結婚し、最後まで自分の考えを持たない点が挙げられる。本作の可愛い女は、従属性がチェーホフより強調されており、主体性の薄い、非人間的な存在のように受け取られる。

可愛い女の非主体的で「モノ」的な性質は、マルクス『資本論』で論じられる総利潤に由来するのではないだろうか。総利潤とは、剰余価値という、プロレタリアートの労働の価値＝賃金を超えて生み出された価値が搾取され、資本家達の利益となったものである。両者には類似点が二つあり、第一は、一つのものが名前を変えて三種の支配階級に分与される点である。本作の可愛い女は、自身を春子・夏子・冬子の三つ子と偽って、金貸し・頭目・刑事の妻となるが、これは、一人の女が銀行資本家・産業資本家・国家権力に分配されていることを暗示する。これに関して『資本論一一　三巻四分冊』（長谷部文雄訳、一九五〇年八月日本評論社）には次の記述がある。

> かくして、吾々がここで剰余価値のうち資本に帰属する分前としての利潤について語るばあいには、吾々は、総利潤（その分量においては総剰余価値と同一）からの地代の控除によつてすでに制限されているところの平均利潤（すなわち企業者利得プラス利子）を意味するのであつて、地代の控除が前提されているのである。かくして資本利潤（企業者利得プラス利子）と地代とは、剰余価値の特殊的な二成分（中略）以外の何ものでもない。この二つを合計すれば、社会的剰余価値の総和をなす。（四〇六～四〇七頁）

なお、企業者利得は、『資本論一〇　三巻三分冊』（長谷部文雄訳、一九四九年一一月日本評論社）によれば、「総利潤のうちから貸手に支払わねばならぬ利子に対立して」（七三頁）産業資本家に属する利潤である。つまり、マルクスは、搾取により得られた総利潤が、利子・企業者利得・地代として、それぞれ銀行資本家・産業資本家・地主の三者に分割されていると見ていたのである。

第二の類似点は、可愛い女と総利潤が支配階級を利する「モノ」的

存在で、大衆の搾取と結び付いている点である。可愛い女は夫に奉仕する従属的な存在と言え、シンジケートの提言によって夫達を不況から救い出している。そして、彼女の提案したシンジケートは、市民の苦境や泥棒＝労働者を生贄にすることで利益を上げている。また、一〇場では、金貸しが、可愛い女に借金の「証文を手渡」（二五一頁）していたり、頭目が市民の家から盗み取った「たっぷりした札束」（二五二頁）を彼女へ贈ったりしており、搾取に基づく利益と可愛い女が結び付いている。無産階級の搾取によって齎される利益が総利潤であるが、これもまた、支配者階級に所有される点で、「モノ」的存在と言える。

なお、『資本論』における総利潤の分有者の一つは地主であったが、本作では、刑事＝国家権力に改変されている。その理由として、共産党からの影響が候補の一つに想定される。「一九六一年綱領」（一九六二年一一月日本共産党中央委員会出版部『日本共産党綱領集』参照）には、次のようにある。

> 現在、日本を基本的に支配しているのは、アメリカ帝国主義と、それに従属的に同盟している日本の独占資本である。（一一八頁）
>
> 戦後の土地改革によって半封建的・地主的土地所有は、農地の面では基本的には解体されたが、それは妥協的なブルジョア的革命であったので、広大な山林原野は解放されず、その他の土地関係や経済的社会的諸関係に、いろいろ不徹底な面をのこした。にもかかわらず、商品的貨幣的諸関係はひろがり、国内市場は拡大された。（一一九頁）
>
> 党はアメリカ帝国主義と日本独占資本の利益を代表する政府の打倒のために一貫してたたかう（一二九頁）

このように、当時の共産党は、独占資本と政府を日本の支配者と捉え、地主を、農地改革によって力を削がれた存在と認識していた。ここから本稿は、公房が、共産党の現実認識を参考に、力の弱まった地主に代わって、権勢を強めていた国家権力＝刑事を登場させたと推測した。

以上の通り、可愛い女は総利潤に擬され、金貸し・頭目・刑事が彼女の共有を決める場面は、銀行資本家・産業資本家・国家権力による利潤を巡る抗争の終結と、彼らの利害の一致を意味していよう。

最後に可愛い女の行った組織化を見ておく。一二場の彼女は、苦境に陥った金貸し・頭目・刑事へ、次のような助言する。

> 可愛い女　（前略）すばらしい考えがうかんだわ！……（まず、金貸しに向って）ねえ、あなた、こちらに（と頭目を指し）お金を貸してあげるのよ。ちょうど大口の借り手をさがしていたところだったんでしょう？（二五八頁）
>
> 可愛い女　（頭目に）その手形を、あなたが盗むのよ。今度は、かくし場所を、私がよく見ておくわ。（二五八頁）

可愛い女（刑事に）そして、刑事さん、それ［手形を盗んだ泥棒］をあなたが捕まえるのよ！（二五九頁）

しかし、この提案は、金貸しが手形を盗まれ、頭目が捕まってしまうものであったため、両者から拒絶される。

その後、金貸し・頭目・刑事が一層困窮した一四場において、先の案を改善した「〝うるわしき友達〟の歌」（二六一頁）という助言を行うが、その内容は以下の通りである。刑事は窃盗を黙認し、代わりに泥棒集団は定期的に仲間を出頭させる。金貸しが泥棒集団へ融資する代わりに、泥棒達は、金貸しが市民へ貸した金を盗み、被害に遭った市民へ金貸しは再び貸付を行う。この案は、金貸し・頭目・刑事に損害を与えることなく、利益を増大させるものであったため、三人は受け入れ、シンジケートを結成する。

本作のシンジケートは、支配者階級を利するために、民衆を搾取する組織と見做せ、実際、一五場では、追い詰められた市民が「首をくくって死」（二六三頁）んでいる。その一方、失業状態だった泥棒＝プロレタリアートに雇用を提供しており、労働者にとっては救い主であるようにも見える。しかし、シンジケートが泥棒の供出によって維持される点や、一四場の通信が供出される場面で、シノビ班長やタタキ班長が通信を人柱に選定している点から、泥棒達は、幹部達の胸三寸次第で、いつ逮捕されるか分からない、弱い立場に追いやられてしまったとも捉えられる。実際、一四場では、「特配品」と名付けられた二人の泥棒が刑事に供出されているが、その様は「ゆわいつけられ」「ふらふらと」（二六四頁）したもので、無理矢理に供出されているにも拘らず、頭目達に逆らえなくなっていると読める。市民に加えて労働者も搾取・抑圧されていると言えよう。

以上の通り、可愛い女は、総利潤を寓した存在と解釈できる。プロレタリアートの搾取によって成り立ち、資本家や国家を富ませる総利潤と同様、彼女も、シンジケートの結成を補助する形で、支配階級である夫達へ利益を齎し、大衆の搾取を拡大させる。彼らのシンジケートは、支配者達が経済的苦境を脱するためのもので、可愛い女＝総利潤が鍵となったこの提携は、物質的欲求に基づいた組織化を象徴していると見做せる。

三　泥棒通信の寓意

泥棒集団の一員である通信は、前述したように可愛い女の対立項[5]として構想されており、主題を探る上で重要な人物である。活動家の寓喩という鳥羽説（前掲）に異論はないが、六全協への批判を読み取る点には疑問がある。

ここで六全協について、中北浩爾『日本共産党』（二〇二二年五月中央公論社）を基に略述する。一九五〇年代前半の共産党は、暴力革命の達成を目的に破壊活動を行っていたが、当該路線推進派だったスターリンや徳田球一が五三年に死亡すると、平和革命路線の宮本顕治が党の主流となり、五五年の六全協で暴力革命は否定された。

鳥羽は、通信を暴力革命推進派の先鋭的革命家と読み、それを追放

した泥棒集団を、暴力革命を否定した共産党のアレゴリーと見ている。後述の通り、通信が暴力革命を推進していたという解釈は成立し得るが、本作の泥棒はプロレタリアートの寓喩と言え、泥棒集団＝共産党とした上で、通信追放に六全協の諷刺を読むのは難しい。

対して本論は、通信＝大衆理解を欠いた共産党党員、通信と同じ思想を持った泥棒＝革命家、一般の泥棒＝プロレタリアートのアレゴリーとそれぞれ解釈し、通信が自身の思想を実現するために、泥棒を啓蒙していたと読んだ。以下、これについて詳述する。

二場の通信は、「泥棒は、改革者だという、理想がなけりゃなりません。ぼくは、泥棒に理想をあたえるために、こうして新聞を発行して、みんなに呼びかけているのです」（二二五頁）と述べ、四場では、泥棒集団の技術班長に対し、「全人民が、泥棒の思想に共鳴して、泥棒になってしまうまで」「団結を守りぬ」くと語っている。また、ここのト書きには「泥棒通信のオルグ」（二三一頁）とある。六場の、泥棒集団が市民を眠らせるシーンにおいては、「人民を睡らせるばかり」では、いつまでも「人民を味方にすることなんかできやしない」（二三七頁）と発言している。このように、改革思想に基づいて泥棒の組織化を試みている点や、人民[6]・オルグ[7]という左翼用語と関係する点から、鳥羽の指摘したように通信は共産党員のアレゴリーと言える。

また、通信は、全人民が泥棒の思想に共鳴して泥棒＝改革者となることを望んでいたが、本作に登場する被支配者層は、市民と泥棒＝労働者であるため、ここで言う全人民とは、それらの総称と考えられる。マルクス主義において、市民は都市民の他に小市民＝中産階級を意味する語としても使われる。本論では、市民と泥棒が区別されていることに鑑みて、市民を中産階級の寓喩と捉える。

それでは、人民に受け入れられるべき泥棒の思想とは一体何であろうか。女秘書の台詞、「泥棒の歌……あれが傾向がわるいから、［通信は］もっと正しい思想の歌にしなけりゃ駄目だっていうのよ」（二二五頁）より、通信の思想は彼の歌に反映されていよう。

まずは四場「〃悪の館に〃の歌」（二三一頁）を見ていく。

悪の館にとらわれて／すすり泣く姫君／その名は黄金（こがね）／いざ立ちてゆかん／われら泥棒／ああ　われら泥棒／正義の味方

通信＝共産党員だから、悪の館＝資本家と読め、資本家に囚われた姫君＝黄金＝資産を盗むことの正当性を主張した歌と解釈できる。つまり、通信は泥棒による資本家からの窃盗を正義の行為と見ているのであって、鳥羽の指摘する通り、この点は暴力革命の肯定を意味していよう。

資本家から盗み続けた先には、一体、何が待っているのだろうか。四場「〃いつか　子供たちが〃の歌」（二三二頁）には、次のようにある。

いつか　子供たちが／もう無くなった／泥棒という言葉の意味を／父親にたずね／父親は静かに思い出を語る／そんな平和な日のために／今日　われらは盗む

これについて鳥羽は、泥棒という語がなくなるのは、泥棒が消失した時、すなわち、盗む対象＝資本家のいない共産主義社会が実現した時であると解釈し、通信が泥棒を革命家と見ていることを指摘している。

これら二つの歌に基づけば、泥棒の思想とは、人民の中でも泥棒集団に属する泥棒が革命の主体にならねばならない、という考えを指していよう。これは、前掲『共産党宣言』にも見られるもので、次のように記述される。

> （前略）ただプロレタリアートのみが真実の革命的階級である。他の諸階級は大産業のために衰頽（ママ）し没落するが、プロレタリアートは大産業に最も特有な産物である。
>
> 中産階級たる小工業家、小商人、職人、農夫等は皆、自己の・中産階級としての・存在を維持せんがために、ブルジョアジーと闘ふのである。故に彼等は革命的ではなく保守的である。否寧ろ彼等は反動的である（三九頁）

更に言えば、前掲「泥棒は、改革者だという理想が、なけりゃなりません」より、通信は泥棒を、思想を持つ者と持たない者とに区別しており、前者は改革者で、後者は単なる賃金労働者と言える。ここから、泥棒集団には革命家と単なる勤労者が混在している、という通信の認識が看取できる。

この通り通信は、資本家から盗み続けることで共産主義社会が実現されるという思想を持ち、泥棒を変革の主体と見ていた。これを泥棒の思想と呼ぶ彼は、泥棒＝賃金労働者や市民を含む全人民を、思想を持った泥棒＝革命家にしようとしていた。後述の通り、働きかける対象が泥棒であることから、彼は市民よりも労働者に強い関心を寄せていたと言え、泥棒集団を革命家集団、言い換えれば共産党員にすべく活動していたと見做せよう。

続いて、具体的に通信の運動を分析しよう。技術班長を勧誘している点や泥棒通信を頒布している点から、通信は、泥棒の思想に基づいて泥棒＝プロレタリアートを組織化しようとしていた。

また、歌＝思想と見ている通信は、頭目の女秘書から「団歌改正論者」（二二五頁）と呼ばれ、四場で、技術班長に自作の団歌を披露していた他、一三場では、「新団歌の制定」（二六〇頁）を頭目に要求するよう泥棒達へ働きかけていた。通信にとって、歌＝思想であるから、彼は泥棒達の思想改良に執心していたと捉えられる。

他方、通信は、頭目に反抗的な態度をとっており、四場では、他の泥棒を罠に嵌めようとする頭目を糾弾し、六場では、団長作詞作曲の眠りの歌に対し、「ぼくは反対だね」（二三七頁）と述べている。また、眠りの歌の秘密が刑事に知られ、窃盗が不可能になった一三場では、次のように頭目を非難している。

> 泥棒通信　（前略）なぜ、働かしてもらえないのか？（中略）それは、ぼくらが、うたをなくしたからだ！
>
> 元婦人部長［泥棒集団員］　そうです。団長が、私たちの秘密を売ってしまったからです。

泥棒通信　「歌を忘れたカナリヤ」の運命は、どうだったか？
元婦人部長　「裏のお山」に捨てられました。
泥棒通信　そのとおり、この危機に際して、敵の牙城に油を売りに行っているような団長にはそれこそ正しい裁きというものだ！（二五九頁）

「歌を忘れたカナリヤ」が「裏のお山に」捨てられたという箇所は、西條八十「かなりや」（一九五一年九月三十書房『西條八十純情詩集』参照）に拠ると考えられ、「歌」は眠りの歌を、カナリヤは頭目をそれぞれ指す。八十の詩では「唄を忘れた金絲雀は／後の山に棄てましよか／いえ　いえ　それはなりませぬ」（八六頁）であるが、本作ではカナリヤが捨てられたに変えられ、通信が頭目の追放を主張していると解釈できる。

上記の通り、通信は、思想に基づく、泥棒＝労働者の組織化や団歌改正、頭目＝産業資本家への反抗を行っており、これらはいずれも共産主義社会実現のためのものと見做せる。

そうした通信への泥棒達の評価を考えよう。四場の技術班長は、全人民を泥棒にするという通信の思想を「あほらし」（二三一頁）と切って捨て、女秘書によれば、頭目は通信の行動を脅威に感じていない。他方、同じ四場で女秘書は、「あれでけっこう、若い連中のあいだには、［通信の］支持者が多いらしい」（二三二頁）とも語っている。通信は六場以降登場せず、再登場した一三場では、頭目を批判して、一部の泥棒から「拍手「そうだ！」の声」（二五九頁）をもらっているし、「組織の民主化、経理の公開、団長の改選、それから新団歌の制定」を要求した際には、班長達に「一理あるかもしれん」（二六〇頁）と言われている。しかし、一四場で、刑事に対する陽動作戦が提案されると、一同から囮になるよう求められ、その後は、シンジケート支持へ回った泥棒全員の意見で刑事に供出されてしまう。このように、前半の通信は、班長や頭目などの幹部に評価されない一方、一部の泥棒に支持されていたが、泥棒の生活が貧窮した終盤では、一時、班長達をも取り込みかけたものの、最終的に泥棒全体から見捨てられてしまったのである。

反抗的な通信が、上層部から認められないのは当然だが、一般の泥棒からも支持を失ったのはなぜだろうか。泥棒達は、通信をスケープゴートに自らの生活を守ろうとしているため、彼らにとって通信の思想より食い扶持の方が大事だったのは明らかである。ところが、団歌＝思想の改正に執心していた通信は、皆が働けず困っている時でさえ、「組織の民主化、経理の公開、団長の改選、それから新団歌の改正」を要求し、泥棒の欲求に目を向けていない。彼は思想を優先し過ぎるあまり実生活から乖離しており、それこそが泥棒の組織化に失敗し、人柱にされた原因だったと言える。

ここで、通信の行動を解釈する補助線として、大衆や社会運動に関する公房の考えを確認する。対談「良識による共犯」（一九五八年一一月一日『図書新聞』、『全集九巻』収録）で公房は、「支配階級であるとか独占資本というものがあるような総合的な世界としては考えられない」（三四〇頁）という庶民の世界認識を、共産党や知識人が理解でき

ていないと語っていた。エッセイ「〝予言機械〟の中の未来」（一九五九年一月一日『週刊読書人』、『全集九巻』収録）でも、現代では「大衆が未来に対してはたす役割が決定的なものにな」っており、「ありのままの大衆の姿を直視せざるをえない」にも拘らず、「見る目はいぜんとして庶民か人民かという古い見方から脱しきれ」（三九九～四〇〇頁）ていないために、多くの知識人が正しく大衆の現実を評価できていないと主張していた。つまり、公房は大衆と共産党員の間に価値観の乖離を見ていたのである。

しかし、こうした点に共産党員は問題意識を持っていなかったらしく、座談会「第三回「アカハタ短編小説」審査をおわって」（一九五九年九月二九日『アカハタ』、『全集一一巻』収録）で公房は次のように語っている。

（前略）日常闘争だけしているのではないので、政治と日常要求との接点みたいなものはあるわけです。ところが政治的なことになると紋切り型の文句で、一枚のビラのようなもので片づけてしまう。また片づくと思っているところが問題です。いかに優秀な共産党員だって自分で手に負えなくなるような飛躍とギャップがあるだろうし、悩みがあるはずなんだな。ところがそこんところが、いつものほほんとしているんだ。（一九四頁）

また、公房は、エッセイ「組織悪」（一九五八年一〇月一日『新潟日報』夕刊、『全集九巻』収録）でも、「上から各成員の意志とは無関係につくられた組織では、かえって人間を押し殺してしまうようなものにさえなりかねないのだ」（二七九頁）と述べている。

他方、彼は、座談会「危機について」（一九六〇年一〇月季刊『現代芸術』、『全集一二巻』収録）で、河川流域での運動を例に社会運動を論じている。それによると、河川管理を人民で行う場合、住所や職業で利害は衝突するが、災害対策のようなきっかけがあれば「意見の調達や統一された政策を生みだすチャンス」が生まれ、そして「こうした生活を構造的に変える闘いが日常的に組まれていれば」、「その上に立った政治闘争も、単なる反対闘争や危機意識によるもり上がり」（三〇三頁）に留まらないものになるという。

ここまでで明らかなように、公房は、共産党の理想を押し付けた政治闘争ではなく、大衆の欲求を掬い上げた組織と、それに基づく社会運動とに変革の可能性を見ていた。この考えは、思想に執心し、泥棒の願望へ関心を持たない通信と真逆のものである。坂堅太は、「安部公房の東欧体験」（二〇一三年一二月『日本文学』六二・一二）で、殆どの大衆を指導されるだけの存在と見て信頼せず、一部の信頼できる人々だけを大衆と捉える共産党のあり方に、公房が批判的だったことを指摘している。この点と本文の記述を踏まえると、通信は、大衆から乖離した共産党の危うさを諷喩した存在だったと解釈できる。

四　「根本テーマ」の考察

公房は、「ミュージカルスの反省」（前掲）において、「「泥棒通信」

（理想主義者）は、ついに無思想という美徳による組織者である「可愛い女」に勝てなかった」ことが、本作の「根本テーマ」だと語っていた。通信と対照されていることから、「思想」は政治思想を指すと考えられ、この文言は、共産党的組織化＝通信の組織化が、政治思想に基づかない組織化＝可愛い女の組織化に敗北したことを意味するだろう。

なぜ、通信は可愛い女に敗れたのだろうか。それを解き明かすために通信と可愛い女を対比しよう。先述の通り、通信＝共産党員、可愛い女＝総利潤で、前者は思想による組織化を、後者は利益に基づく組織化をそれぞれ象徴していると解釈できる。つまり、通信と可愛い女は、政治的思想と構成員の欲望という、異なる組織化の論理を各々表しており、この内、可愛い女の組織化の方が、先述した公房の考えに近かったと言える。

実際、本作の通信は、三節で論じた通り、その理想の高さゆえ、不況で貧窮した泥棒の心情が理解できておらず、そのことが組織化に失敗した理由であったと読解できる。一方、可愛い女は、資本家に利益を与える総利潤同様、支配階級の夫達へ利益を与えるべくシンジケートを提案し、それは街の経済を支配する程になっている。共産党員だった公房が、通信＝共産党員ではなく、資本家を繁栄させたのは皮肉で、思想に偏重した党へ警鐘を鳴らしていたと解釈できよう。

以上をまとめると、本作では、通信の革命思想と、可愛い女の経済的利益への配慮が対比されていると読める。シンジケートの構成員である金貸し・頭目・刑事は自らの利益を追い求める存在であるため、可愛い女は夫達の欲望に沿った組織化を果たしたと捉えられる。政治思想と大衆の欲求を結びつけることを説き、上からの組織化を問題視していた公房は、革命のための組織においても人々の欲望を焦点化すべきと考えていた。そうした彼の組織観を踏まえると、賃金労働者の欲求を無視した通信が、資本家の欲望を叶えた可愛い女に敗れるのは必定であった。従って、思想一辺倒ではなく、大衆の願望に基づいた組織化の重要性が、本作の「根本テーマ」だったと解釈できよう。

三節で述べたように、公房は、度々共産党を批判していたが、それは、「日本共産党は世界の孤児だ――続・東ヨーロッパで考えたこと――」（一九五六年一〇月『知性』）から始まっている。公房の入党は一九五一年で、除名は六二年だから、党員生活の後半は党に批判的だったのだ。「根本テーマ」の内容から分かる通り、本作は、大衆の組織化という面から党を批判した作品で、党に対する公房の態度が投影されていよう。公房は、共産党の大衆軽視を憂い、党を寓した通信の破滅と、資本家および国家権力の繁栄を描くことで、現状の党および党員のあり方に疑義を呈したのだろう。

むすび

本論は、「可愛い女」の本文分析および先行文献との比較によって、登場人物の寓意と作品の「根本テーマ」を検証したものである。

本作には、レーニン『帝国主義論』、チェーホフ「可愛い女」、マルクス『資本論』からの影響が窺えた他、一部表現はマルクス『剰余価値学説史』と西條八十「かなりや」に依拠していた。

登場人物の寓意について言えば、金貸しは銀行資本家、頭目は産業資本家、刑事は国家権力、可愛い女は総利潤、通信は大衆理解を欠いた共産党員、泥棒は賃金労働者（プロレタリアート・無産階級）にそれぞれ擬せられていた。また、眠りの歌は労働手段を寓し、プロットは『帝国主義論』における独占資本の形成過程を踏まえたものと解釈できた。

公房は、「「泥棒通信」（理想主義者）は、ついに無思想という美徳による組織者である「可愛い女」に勝てなかった」ことが本作の「根本テーマ」だったと述べていたが、その意味するところは、人間の欲求を無視した思想一辺倒の組織化は失敗に終わらざるを得ないということであり、ここに日本共産党への批判を看取できよう。

注

（1）不思議な歌で市民を眠らせる設定は、ギリシャ神話を参考にしていよう。佐々木幸喜「「プルートーのわな」論」（二〇二五年三月臨川書店『安部公房×科学』所収）が指摘する通り、一九四九年までに、公房は馬場睦夫・松村武雄編『神話伝説大系第二巻　印度・波斯篇』（一九二九年五月近代社）を読んでいた。同シリーズの中島孤島編『神話伝説大系第四巻　希臘羅馬篇』（一九二七年二月近代社）第一三章には、歌によって龍を眠らせる、オルフェウスの逸話が登場する。オルフェウスは、ヤソン（現在は、イアーソーンと訳される）が「金毛の羊皮」を探すために作った、アルゴー船の乗組員となり、旅の末、彼らは「金毛の羊皮」の存在するコルキス国に辿り着く。ヤソンに一目惚れした、コルキスの王女で魔法使いのメデヤ（現在は、メーディアと訳される）は、ヤソンとオルフェウスを連れて「金毛の羊皮」を守る大蛇のもとへ向かう。彼女の指示を受けたオルフェウスが「竪琴をとつて、不思議な歌をうた」（四六一頁）うと、大蛇は眠りに落ち、その隙にヤソンは「金毛の羊皮」を盗み出した。

眠りの歌というアイディアは、例えば子守歌のようにありふれているし、眠っている相手に窃盗を働くのも珍しくない。しかし、佐々木（前掲）が指摘した通り、公房は、既に小説「プルートーのわな」（一九五二年六月『現在』）でオルフェウスの冥界下りを用いており、オルフェウスに関心を払っていたと考えられる。これと先の類似点を併せると、眠りの歌と窃盗の組み合わせが、アルゴー船神話から着想された可能性は十分認められる。

（2）公房がどの翻訳で読んだか不明であるため、以後、マルクス主義文献については、共産党員・伊豆公夫執筆の読書案内『何を読むべきか――マルクス主義文献解説――』（一九四九年一月正旗社）記載の訳本を、便宜上、参照する。

（3）「作品ノート 二」（一九九七年七月新潮社『全集一巻』）によれば、中埜肇は成城高校時代の同級生で後のドイツ哲学者。

（4）一期・全三八巻・一九二七年三月～一九三〇年五月新潮社、二期・全一九巻・一九三〇年六月～一九三二年八月新潮社。

（5）本稿では論じる紙幅がなかったが、婦人部長も可愛い女と対比される存在である。可愛い女が物体のような存在で、夫達に奉仕しているのに対し、婦人部長は自意識が強く、自身の利益・理想のため、時に仲間の泥棒を圧迫している。本論でも述べた通り、可愛い女は男に従属的な女の寓意と捉えられ、対する婦人部長は、泥棒集団における女性の地位向上を主張していることから、女性運動家の寓意と見做せるだろう。

（6）人民民主主義や人民戦線のように、左翼と結びついた語彙。共産党機関誌『前衛』でも人民は度々使われる。

（7）オルガナイザーorganizer の略で、労働組合や階級政党など、大衆運動

における指導者、組織者を指す。（JapanKnowledge 所収『日本大百科全書』「オルグ」参照。二〇二五年一〇月九日最終閲覧。https://japanknowledge-com.kyoto-u.idm.oclc.org/lib/display/?lid=1001000042189）。

［付記］

引用について、特筆なき場合、公房の小説・戯曲は初出に、ノンフィクションは『安部公房全集』（全三〇巻、一九九七年七月～二〇〇九年三月新潮社。『全集』と表記）にそれぞれ拠った。常用漢字に改め、適宜ルビ・傍点は略した。［］内は論者による補足で、「／」は改行を意味する。また、引用における傍線は論者によるものである。本研究は、昭和文学会第七三回研究集会（二〇二三年一二月一六日二松学舎大学）での発表「安部公房「可愛い女」論――寓意の分析――」を基にし、京都大学によるＳＰＲＩＮＧ研究プログラム（ＪＰＭＪＳＰ２１１０）の支援を受けた。